HITOKOMART

No. 2

2015年頃から一コマ漫画を大きなキャンバスに描くことを続けてきました。
小さなサイズのケント紙にペンと水彩絵の具で描くというこれまでの1コマ漫画の表現形式では充分に伝えられないものがあること、アクリル絵の具で刷毛や筆で描くダイナミックさに魅力を感じていること、ユーモアアートとしての見せ方にこだわって描き続けてきた作品は2018年度の漫画家協会賞カートゥーン部門の大賞を頂きました。
あらためてこの場で私なりのユーモア表現をご覧いただければと思います。

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

F-50号

あこがれ

ショーウィンドウの中のトランペットを覗き込む黒人少年の姿は，多くの人たちの記憶の中にイメージとして存在する。しかし正直なところこれが何の映画なのかあるいは小説だったかを私自身は知らないでいる。サッチモと呼ばれたルイ・アームストロングの少年時代の逸話だとまことしやかに解説する人もいるがどうやら伝説の巨人に乗っかった作り話のようだ。
映像としては何年か前に某クレジット会社のコマーシャルにそういうシーンが作られ流されていて，それを記憶している人も多いようだが、これも元々あった話をパロディとして使ったものだ。
今なら何でもカードで買ってしまって、あとで多重債務に苦しむ事になるのかもしれないが、貧しい少年が手の届かない世界をガラスの壁を通して眺めている姿はいくつもの物語を想像させる。

B-2

そろわぬ足並み

コロナは最初には予想もしなかった展開を見せ世界中を混乱させている。多くの研究者の英知を結集しても未だ決定的な解明はされていないしワクチンの開発もまだまだ心もとない。テレビでは連日専門家とされる医師学者、研究者たちが日々変化する感染状況を眺めながらそれぞれの立場でコメントする。そんな毎日の情報を受けてたくさんのコメンテーターたちがわかったようなコメントする。政府と自治体の見解の相違や対応の違いも出てくると庶民は誰か道を指し示してくれる絶対的なリーダーの出現を期待するが日本ではそれはなかなか難しい。誰も最終的な責任を取るのが怖いからだが大阪人ならこう言うはずだ。「知らんけど」

空気注入

芸能人たちの家族のルーツを探るテレビ番組が話題だ。先祖代々の家系図があるような由緒正しき家は限られているだろうが、多くの庶民の家庭では二代前の先祖の情報でさえ把握できていない人も多い。親がわが子や孫たちに自分の人生を語ることの無い人も少なく無い。積み重ねてきた人生で得た知識や体験は、記録できるホンの一部を残して、死とともに消滅するが、『才能』は見えないところで受け継がれる。番組を見る度に今の自分に至る先人や自分の歴史をちゃんと次の世代に伝えておきたいと思うのは、歳をとった証拠かなと思う。

F-３０号

乗り換え

暑い夏の日
仲良しだった同級生がお父さんと遠くの街へ引越して行く。
海辺の無人駅まで、みんなで見送りにやって来た。
一緒に作った縄電車からこの駅で乗り換えるのだ。
それぞれの心の中にこの日の情景は鮮明に残るだろう。
いつの時代も子どもたちの出会いや別れは、
大人たちの事情で決められて行く。

F-30号

深夜徘徊

深夜の街を車で走っていると歩道に沿って動き回る路面清掃車と遭遇する事がある。
高速で回転するブラシで道路隅のゴミを次々とかき込みながら、ちゃんと散水もして通り過ぎる。

家庭用のお掃除ロボットは基本的にこの動きと同じようだが当然の事ながら散水は無い。
海外旅行をして日本に帰って来た時、いつも感じるのは街に殆どゴミが無いことだ。
都会のビル街でも、地方の住宅街でもそれは同じである。
日本人の道徳心と美意のなせる技と思うが、路面清掃車の通らない細い道路や路地裏も綺麗なのを見ると、もしかすると、大量の屋外用の小型お掃除ロボットが深夜の街中を動き回っているのではないかと思ったりする

B-2

趣　味

F-8号

今ならハッシュタグを付けたメッセージをリツイート、拡散することが賛同の意志表明になり、それが集まると大きな力になるということになるのだが、先日の裁判では他人の問題あるツイートを軽い気持ちでリツイートした人にも責任が問われるという判決が出て、安易なリツイートに警鐘が鳴らされた。
スマホの画面に指先を軽くタッチすれば良いだけの現代人には、自分の指先を切って血判を押し、命を賭けるほどの覚悟はないだろう。

血判状

B-2